

リハビリ病院に入院した場合

●検査

CT・MRIなどの画像検査や脳波検査に加え、神経心理学的検査や行動観察等を通して、高次脳機能障害があるかどうかも含めて、さらに実態を確認することになります。小児に使える神経心理学的検査は限られますが、次のようなものを用いることができます。

検査の方法

すべての検査を常に行うわけではありませんが、つぎのようなものを用いて検査を行います。

- ① WISC-IV (Ⅲ), K-ABC 心理教育アセスメントバッテリー
 - ② 語の流暢性
 - ③ Trail Making Test (注意力検査)
 - ④ 三宅式記銘力検査 (言語的記銘力の評価)
 - ⑤ ベントンの視覚記銘力検査 (視覚的記銘力の評価)
- * 記銘力=新しく体験したことなどの記憶
- ⑥ Paced Auditory Serial Addition Task (聴覚的注意機能の検査)
 - ⑦ 慶応版 Wisconsin Card Sorting Test (注意や概念の転換の評価)
 - ⑧ Wechsler Memory Scale ウェクスラー記憶検査
 - ⑨ 前頭葉機能検査 FAB
 - ⑩ 遂行機能障害症候群の行動評価

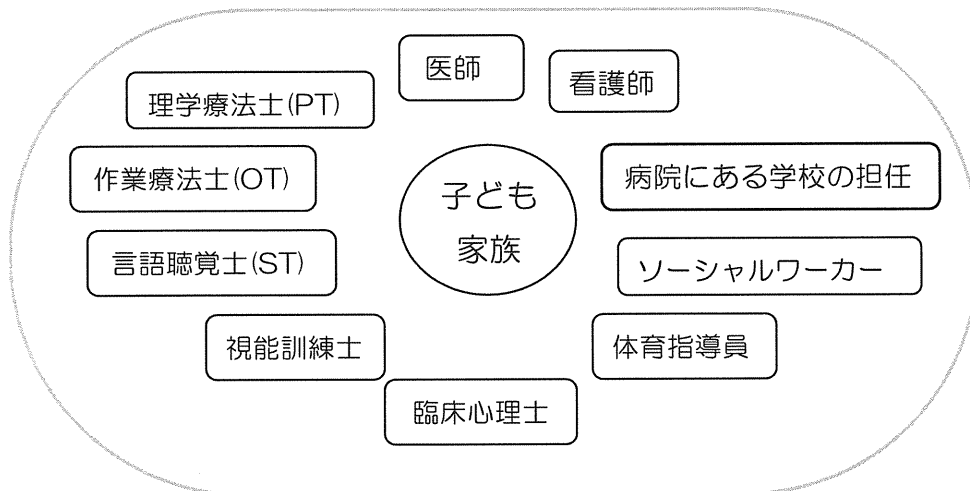


生徒作品

●病院でのリハビリ

高次脳機能障害と診断されると、個々の症状に適したリハビリが行われることとなります。病院では医師を中心に様々なスタッフがチームになってリハビリにあたります。

～次の図は、リハビリを行う病院のモデル的なケースを示しています～



それぞれのスタッフが検査等によって細かく評価をし、それに応じた訓練を行います。特に高次脳機能障害の場合、多くは次のような訓練が中心となっています。

理学療法士(PT)…運動機能の障害が見られない場合でも、姿勢コントロールの力や集中力を養うために、体幹バランス訓練・運動訓練等を行う
また、退院後の学校生活のため体力を向上させる

作業療法士(OT)…注意・集中力・認知機能を高めるために、手工芸などの作業を通じた訓練を行う。学校生活を見据えた日常動作訓練を行う

言語聴覚士(ST)…言語評価をし、それに基づいて個々に応じた課題を実施、言語理解や表現の練習をする

臨床心理士 … 予定を視覚化して提示する、構造化する等によって環境を整備し、手を貸しながら様々な体験を積み重ねさせる
記憶障害に対する学習方法の工夫や補償手段の獲得の支援、問題行動に対するソーシャルスキルトレーニングを行う
また、本人の自覚を促し、周囲の人が症状を正しく理解し、対応できるようにする働きかけも行う

病院で行うリハビリは、次のようなことに配慮しながら行われています。

- 回復の段階に沿ってリハビリを進める
- 課題は本人の日常生活に結びついた具体的なものを用いる
- 本人が混乱しないよう、手がかりの提示や行動のパターン化などによって環境を整える
- 日常生活への実用化を念頭に行う
- パソコンやICレコーダー・福祉機器など、代替手段の利用にも積極的に取り組む

リハビリは、専門機関が行うだけでなく、退院後は家庭や学校で続けていくものです。この配慮事項はそこでも重要なポイントとなります。

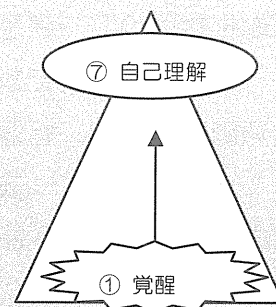
そして、なにより大事なことは、楽しく興味をもって取り組めるプログラムが一番であるということです。

★リハビリを「段階に沿って進める」のは、回復にはある程度順序があるからです。

つまり、人間のもつ神経心理学的機能の諸要素は、原始的なものからより高度なものまで、階層をなしていると考えられています。

- ① 土台として〈覚醒〉〈心のエネルギー〉があり、
- ② その上に、活動に取り組もうという〈意欲や自己を抑制する力〉、
- ③ 続いて、〈注意力や集中力〉
- ④ 次に、〈情報処理の力〉
- ⑤ 〈記憶力〉
- ⑥ 物事を〈遂行する力〉
- ⑦ 最後に、〈自分を客観的に理解する力〉

となります。



そして、これらは常に下から上に影響を及ぼしていると考えられるのです。ですから、記憶力が低下しているからといって、心のエネルギーが低く、すぐ疲れてしまう状態の人に、いろいろな手立てを提案しても、なかなか実行できないということになってしまいます。

退院後 課題が生じて再度受診する場合

怪我や病気は治ったはずなのに、「以前とどこか様子が違う」と、保護者や学校の教員が気づいて、再度受診することになるケースです。このようなケースはかなり多いと思われます。

【学校で】

授業中じっとしてられない
学習について行けなくなった
宿題や持ち物をすぐ忘れる
友達とうまくやれない 等

【家庭で】

今までできていたことができない
時間通りに登校準備ができない
欲しいものがあると我慢ができない
小さい子のように甘える 等

「どこか違う」「ちょっと変だ」 教員や保護者の気づき



病院受診・入院または外来・リハビリ開始

病院では、先にも述べたように、高次脳機能の検査をし、実態を把握した上で、その子どもにあったリハビリを行うこととなります。

病気や事故で入院治療していた子ども達の抱える課題を見逃さず、適切な治療に結びつけるためにも、子ども達を受け入れた学校では、様々な配慮をすると同時に、注意深く観察し、変化を捉えることが必要です。

*子どもの高次脳機能障害に専門に対応してくれる病院は、あまり数多くありません。その中から一部を掲載しましたので、参考にしてください。(p15)

3. 退院・復学にあたって

退院に向けて

リハビリのために入院している子ども達は一定の期間を過ぎると、退院し、家庭や学校に戻っていきます。退院と復学が順調に進むように、本人を含めていろいろな人や機関が準備をし、連携する必要があります。

●病院から

- ①復学に向けて、身体面・能力・高次脳機能等についての評価を行う
- ②転出先の学校に評価の結果を伝える
- ③必要に応じ、転出先の学校に向いて環境整備等について、確認をする

●病院にある学校がすること

- 学習や行動に関する実態と、行ってきた支援の手立てを地元校に具体的に伝える
- ・入院中に行ってきた学習の内容
 - ・学習面での困難
 - ・障害が学習に及ぼす影響
 - ・行動面での課題
 - ・指導上配慮すべき点
 - ・障害や課題に対しての対処の方法

●本人や保護者がすること

- ①本人の状態に適した学校を選択する
- ②病院・リハビリ等での定期的な評価をし、子どもの状態を客観的に把握する
- ③諸機関との連携を保つ

●学校(地元校)がすること

- ①現在の子どもの様子を知る
 - ・家族から聞き取る
 - ・病院へ行って観察する
 - ・医師や病院スタッフから情報を得る
 - ・学習や対応の方法について、病院にある学校の教員から情報を得る
- ②個別の教育計画を作る
- ③学校の環境を整備する
 - ・施設整備・人的配置・他児への配慮
- ④学校の他の教員と現在の状況や対応方法について情報を共有する

本人・保護者・学校(地元校)・病院・病院にある学校の連携は、退院の時だけでなく、その後日常生活を始めてからも、とても大事です。

なお、こうした子ども達を支える役割を果たしてくれるところとして、親の会を始め、いろいろな NPO 法人が全国にあります。福祉施設にも高次脳機能障害の子どもに対応してくれるところがあります。

これらの諸機関とも積極的につながり、子ども生活の向上に活用していくと良いでしょう。

*どのような組織があるか、これらも資料として、その一部ではありますが掲載しました。保護者への情報提供等に活用してください。

高次脳機能障害の子ども達への支援

神奈川県総合リハビリテーションセンター	http://www.kanagawa-rehab.or.jp/
千葉県千葉リハビリテーションセンター	http://www.chiba-reha.jp/
川崎医科大学付属病院(岡山県)	http://www.kawasaki-m.ac.jp/med/index.html
広島県立障害者リハビリテーションセンター	http://www.rehab-hiroshimaq/kou-jino.html

後天性脳損傷の子供を持つ家族の会 アトムの会 <http://www.atom-kids.net/>

ハイリハキッズ(高次脳機能障害の子どもをもつ家族の会)

http://www.geocities.jp/h_r_kids/

NPO 法人 脳外傷友の会 ナナ <http://www13.plala.or.jp/nana516/>

NPO 法人 脳外傷友の会 コロポックル <http://www.f3.dion.ne.jp/~koropo/>

NPO 法人 脳外傷友の会 高志

http://cgi.geocities.jp/nogai_koshi/php/main/koshitop.php

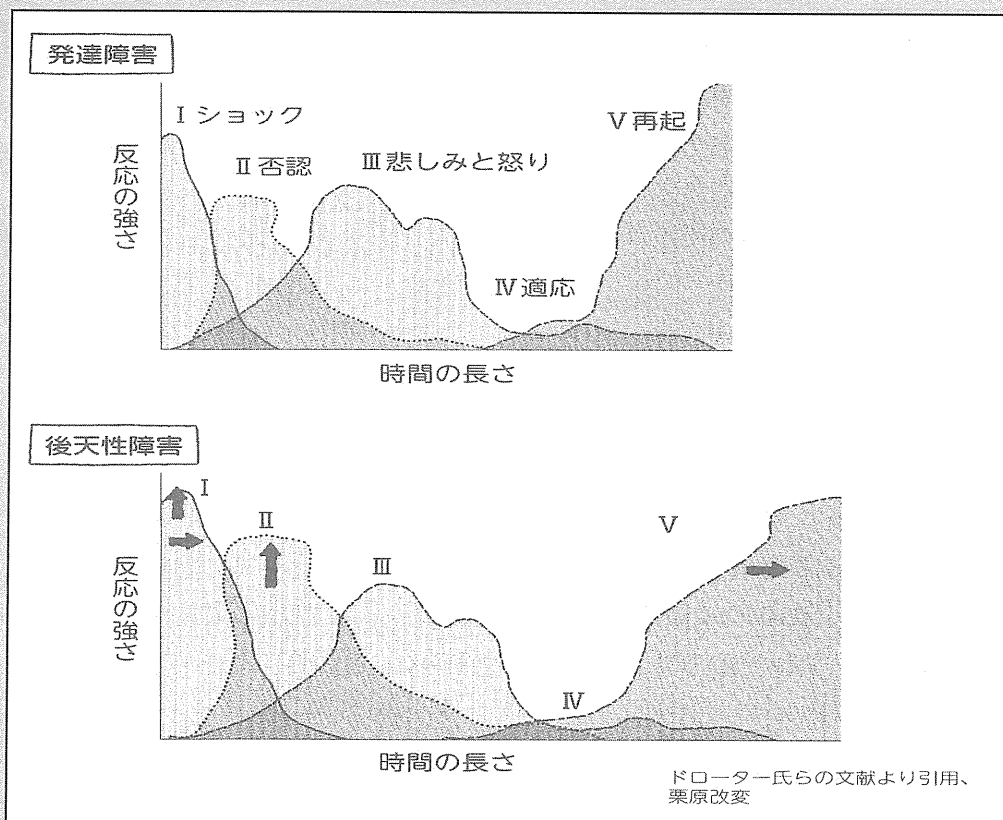
NPO 法人 脳外傷友の会 みずほ <http://www15.ocn.ne.jp/~n-mizuho/>

特に高次脳機能障害の子ども達への支援に力を入れている病院や家族の会を挙げました。このほかにもたくさんの病院や NPO 法人の家族の会などがあります。中でも脳外傷友の会に入っている会は全国に数多くあり、子どもへの支援に関する情報を得ることもできます。

高次脳機能障害の子どもをもつ家族を支える

子どもにとって家族という環境は非常に重要です。高次脳機能障害の子どもの背景に家族がいること、家族が受傷によってどんな思いをしているかを知っておくことは大切です。後天性の障害である高次脳機能障害の場合、家族は「治したい」と思っています。急性期から身体的に劇的に回復するので、その後も回復を期待するのは無理もないことです。家族がその子を受け止めるためにも、学校の先生達の理解が重要です。

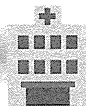
また学校に戻ると、集団の中で学習の遅れや行動の問題が顕著となり、受傷前との違いに直面することになります。子どもが学校で頑張っていること、学校も一緒に支援していくことを伝えてください。



上図は「生まれながら障害のある子ども」の家族が障害を受け入れていくまでの流れを示したものです。下図は「高次脳機能障害の子ども」の家族の障害受容を示したものです。流れは同じですが、高次脳機能障害の場合は反応が強く、「再起」により時間がかかることがわかります。

Ⅱ 高次脳機能障害の子どもを理解について(小・中学校用)

1. 入院生活が始まった時



入院中の子どもにとって、回復し地元の学校に戻ることが大きな目標であり、厳しいリハビリ生活を支える原動力になります。長い入院生活の間、病院にある学校の教員と地元校の先生と連絡をとりあい、共に子どもを支えていくことが望まれます。

〈転校した後も、〇〇小学校・〇〇中学校の子どもとして対応してください〉

机やイス、ロッカー、靴箱など子どもの名前のもはそのまかにしてください。また外泊で自宅に戻っている時は、教室の授業や行事に参加できるような機会がもてると良いと思います。

〈学校だより・学年だよりを届けてください〉

学校のおたよりをとおして、学校の情報を知り、地元校とのかかわりを継続することができます。

〈クラスの子どもへの病気の説明について〉

入院中は急速に回復する段階なので、病気の説明は難しいと思います。まずは本人がリハビリを頑張っていることをクラスの子ども達に伝えて下さい。「車いすの姿を地元の友だちに見られたくない」というケースや、気持ちが落ち着くまで地元校に知らせたくないという保護者もいます。本人および保護者の気持ちを最優先し、大切にして下さい。

高次脳機能障害についてクラスの友だちにどのように伝えるかは、退院時に保護者や病院のある学校の教員に相談して下さい。

プライバシー尊重の原則

- 児童生徒の病気のことは保護者(出来れば本人)がコントロールすることです。
- 病名については、学校として責任をもって管理しなければなりません。
- クラスの友だちやその保護者への病気の説明(病状説明・公開)をどのようにするか、本人と保護者と慎重に話し合っ決めていくべきです。

参考：「小児がんの子どもたちの学校生活を支えるために」

〈クラスの友だちとの交流を作ってください〉

友だちからの手紙やビデオレターなど，地元校と病院にある学校とのやりとりは子どもの励ましになります。また受傷間もない時期に，クラスの友だちとかかわることで，以前のことを思い出すきっかけにもなります。

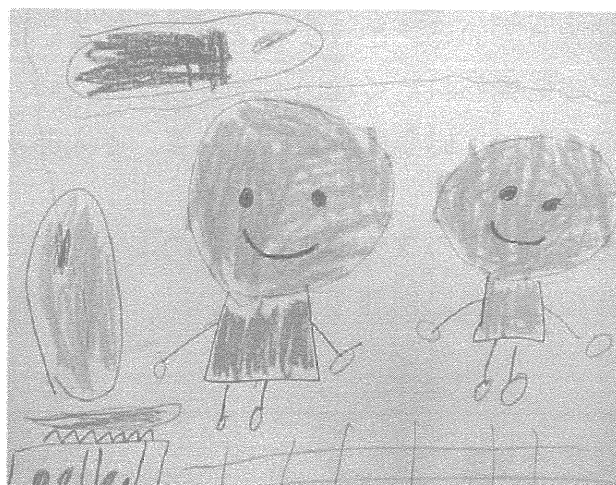
〈入院期間中にクラス替えがあるとき〉

学年がまたがる時，クラス替えの時には仲の良い友だちと同じクラスになるように配慮し，新しい担任の先生に引き継ぎをして下さい。

〈退院日が決まったら〉

前にも触れていますが，本人は地元校に戻ることを大きな目標にして，厳しいリハビリを頑張ってきました。退院の際には，リハビリを頑張ったことを誉めてあげてください。

身体的には回復し，以前と同じように見えますが，高次脳機能障害の症状は見えない障害であり，引き継ぎが必要です。保護者，医療関係者，病院にある学校の担任，地元校の管理職，特別支援教育コーディネーター，地元校担任，養護教諭が一堂に会して支援会議を開き，子どもの情報交換を行うことが大切です。



生徒作品



高次脳機能障害の子どもを理解する

〈子どものこころを支える〉

地元校に戻った高次脳機能障害の子ども達は、まだリハビリ途中です。小・中学校の生活に慣れるまでには時間がかかります。「戻ったばかりのことは覚えていない」と話していた子どもがいました。地元校の学校生活に慣れるまでには時間がかかるようです。また集団生活の中で、受傷前の自分との違いを感じ、自信を失うことが多いようです。周囲が理解し、少しでも自信を積み重ねていけること。また本人も自分のことを理解し対処していけるようにすることが大切です。

〈地元校に戻り、困ったこと〉

地元校に戻った子どもの保護者は、戻ってから困ったこととして、次のようなことを挙げています。

- ・ 学習についていけなかった
- ・ 友だち関係・対人関係でトラブルが多かった
- ・ 障害のことを周囲に理解してもらえなかった

高次脳機能障害は目に見えない障害であり、以前と同じように思えてしまうので、なかなか理解されないことが多いようです。

〈チェックシートで実態を把握する〉

子どもの場合、脳が発達途中であるため、継続的に適切な支援をすることで、症状が変化し改善が期待できます。

以下の「高次脳機能障害の子どものチェックシート」を使い、実態を把握し、支援方法を考えていけると良いと思います。

高次脳機能障害の子どもチェックシート

ボーッと何もしないでいることが多い	注意障害
すぐに疲れる	
質問への返答が緩慢なことが多い	
一つの活動が続けられず、次々と活動内容が変わっていく	
目についたものを次々と触ったり、ほしがったりする	
与えられた課題に集中して取り組むことが難しい	
会話の途中に、自分が思いついたことを話してしまう	
2つのことを同時にすることが難しい	
学習課題でケアレスミスが多い	
同じ質問や話を何回も繰り返し言う	
持ち物を置いた場所を忘れたり、なくしたりする	
日付や日課が分からない	
前回の授業の内容を覚えていない	
昨日の出来事を覚えていない	言語の障害
話そうとするが言葉が出てこない	
話せるがつかえたりして返答に時間がかかる	
会話時に相手の話す言葉の意味が理解できない	
周囲の状況に関心を示さない	行動と情緒 の障害
無気力で促さないと物事に取り組めない	
依存的である	
ちょっとしたことで怒ったりイライラしたりする	遂行機能 障害
自分で計画を立てそのための方法を考え、実際に行動を起こして結果を判断することができない	
指示が無いと行動できない	
思いついたことを何も考えずに行動する	
あくびをしたり、ボーッとしたりすることが多い	易疲労性・ 意欲の低下
少しでも難しいと思うと、集中できなかつたりやる気がなくなつたりする	

〈参考〉

TBI-31「脳外傷者の認知－行動障害尺度」神奈川県総合リハビリテーションセンター
「小児高次脳機能障害アセスメントシート」千葉県千葉リハビリテーションセンター

〈症状の重複〉

高次脳機能障害の代表的な症状は、「注意障害」「記憶障害」「遂行機能障害」「行動と情緒の障害」です。チェックシートを実際にやってみると明らかですが、高次脳機能障害の症状は様々で重複し複雑に現れます。

〈日々の状況の変化〉

「昨日はできていたのに、今日はできない」など高次脳機能障害の子どもは、脳の疲労の影響により、その日によって状況が変わります。一日の後半や週の後半は疲労の影響が大きいことを踏まえておきましょう。

〈受傷前との比較〉

「以前からそのような様子が見られた」と地元校の先生から聞くことがあります。高次脳機能障害の子どもは、苦手な部分はより苦手になっている場合が多いようです。受傷前の様子と比較してどのように変わったのか実態を適切に把握していきましょう。

中学生以上の高次脳機能障害の子どもへの支援

受傷が中学生以上である場合、受傷前に学習の基礎が身につけているので、何度も繰り返すことで、なんとか成績は維持できるようです。しかし疲れやすい状態の中でありながら、これまで以上の努力が必要となるので、本人もギリギリの状態になりがちです。そんな気持ちを受け止め冷静に自分の行動や気持ちを見直させてくれる援助者が必要です。家族では難しいことも多く、身近に理解してくれる先生や友人がいると良いと思います。

中学校での学習は教科ごとに担当者が違います。退院し復学するにあたっては、高次脳機能障害の子どもに関わる担任、各教科担当者、養護教諭、特別支援教育コーディネーターなどが集まって支援会議を開く必要があります。関係者が子どもの実態と支援方法を知り、共通理解のもと対応していけると良いと思います。

具体的な支援方法

子どもの脳が発達途中であるため、適切な対応を継続的に行うことで、予想以上の回復を期待できます。以下は支援方法の例です。

<注意障害の例>

話を聞いていないので、何をしてもよいかわからないことが多いようです。



<対応例>

周囲に注意がそれやすく、話を聞いていないかもしれません。また一斉に話されている場合、自分に話されていると思わなかったりします。

座席を前方にして先生の話に注目しやすいようにします。また個別に声を掛けたり、話の内容をメモで渡したりすると伝わりやすいようです。

<注意障害の例>

課題に最後まで取り組めなかったり、ケアレスミスが多かったりします。



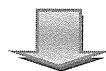
<対応例>

集中が途切れてしまったり、課題をこなすことに焦ってしまったり、細かいことに気を配れなかったりします。

課題の量を減らすと集中して取り組めるようになります。また取り組む前に注意点を一緒に確認したりすると取り組みやすいようです。

<注意障害の例>

細かい作業の時に手元を見続けることが難しく、ハサミで線に沿って切ることが難しかったり、定規で直線を引いたり、分度器の細かいメモリを読むことが苦手だったりします。



<対応例>

線を太くして見やすくしたり、滑りにくい定規を使ったり、メモリが見えやすい道具を使ったり等、取り組みやすくする工夫も必要のようです。

〈記憶障害の例〉

前の授業の内容を忘れてしまい、「習っていない」といいます。



〈対応例〉

学校生活では、次々と覚えることが多く、授業の内容をすっかり忘れてしまうこともあります。

ノートを見て確認すると思い出すようです。また家庭に協力してもらい、自宅でも復習に取り組むようにしてもらいましょう。繰り返し学習することで覚えられるようになります。

〈記憶障害の例〉

忘れ物が多くて困ってしまいます。言って確認したのに忘れてしまっているようです。



〈対応例〉

口頭で伝えられたことを忘れてしまうことはよくあります。大事なことはメモに書くようにしていくとよいと思います。自分が忘れやすいことを自覚して、自分からメモをとる習慣ができるとよいと思います。高校生の子は、ボイスメモや携帯電話のメモ機能を使っていました。

〈記憶障害の例〉

次の授業や日程が分からず、戸惑っている様子が見られます。



〈対応例〉

次に何をすべきか分からず行動できないことがあります。携帯できるスケジュール表があると確認しながら行動できます。スケジュール表には、必要な持ち物を書き込んだり、スケジュール変更を付箋で張ったりして活用できます。慣れるまでは筆箱にメモを入れておき、必要なことをその場でメモする練習なども有効です。

<記憶障害の例>

漢字を何度練習しても覚えられません。



<対応例>

繰り返し書いて練習しても覚えられないことがあります。

練習方法を変えて、「男は田んぼに力」といったように、部首で覚えると覚えやすいようです。

暗記して覚える内容は、意味づけがすると覚えやすいようです。

<行動と情緒の障害の例>

ちょっとしたことで怒ったり、イライラしたりするようになりました。



<対応例>

受傷前と性格が変わってしまい、怒りっぽくなることがあります。

クールダウンできる場所へ移動し、落ち着いたら本人の言い分も聞きましょう。本人の気持ちを受け止め、どうすればよいか一緒に話し合っているとよいと思います。

<遂行機能障害の例>

図工の工作で何もせずぼーっとしていたり、始める前から「できない」と言ったりします。



<対応例>

自分で段取りを立て進めていくことが難しいことがあります。簡単な言葉で手順書を作り、一緒に確認しながら進めていけるといいようです。

また「どうせできないから、やりたくない」とあきらめていることもあります。本人のプライドを尊重しつつ、できることから提示していけるとよいと思います。

〈易疲労性の例〉

授業中、あくびが多いようです。やる気がないのでしょうか。



〈対応例〉

学習に集中すること、周囲に合わせようとするすることで、脳が疲労します。あくびは「脳の疲労」の表れです。脳の体力の回復が十分ではなく疲れてしまいます。このほかぼーっとしたり、多弁になったりする子もいます。特に一日の後半や週の後半に症状が顕著に表れます。

保健室で休憩したり、水を飲んだりすることで回復します。また本人は疲れているという自覚がないので、様子を見ながら休憩を促すようにしてください。

3. 質問コーナー

Q1 発達障害とはどう違うの？

A：高次脳機能障害と発達障害の症状は共通していますが、高次脳機能障害のほうが1人ひとり症状が異なります。例えば発達障害の一つである注意欠陥多動性障害（ADHD）の症状は注意集中障害と衝動性だけですが、高次脳機能障害の子どもでは記憶障害・注意障害・感情のコントロール不良などの症状が複雑にからみあいます。また高次脳機能障害は改善していくため、症状が変化していきます。さらに親はもちろん子ども自身も以前との違いを感じているため、心の支援がより必要になることが多いです。

Q2 子どもと大人の高次脳機能障害は、違うのでしょうか？

A：基本的には同じです。高次脳機能障害は、環境によって症状が異なって見えるものなので、子どもと大人的生活環境が違うので、違って見えることが多いようです。

Q3 通常学級と支援学級のどちらで対応すればよいのですか？

A：あくまでも子どもの症状に合わせて、家族と学校で相談しながらクラスを選んでください。場合によっては日ごと時間ごとに自由が効くような体制が必要かもしれません。

4. 高次脳機能障害についてもっと詳しく知る

「小・中・高校生のための高次脳機能障害支援ガイド（PDF）」

（千葉県千葉リハビリテーションセンター）www.chiba-reha.jp/koujinou-center

「小児の高次脳機能障害とその対応」（神奈川県立秦野養護学校）

<http://www.hadano-sh.pen-kanagawa.ed.jp/kamome>

栗原まな「わかりやすい小児の高次脳機能障害対応マニュアル」（診断と治療社）

栗原まな「小児の高次脳機能障害」（II）

栗原まな「小児の高次脳機能障害 リハビリテーション実践ガイドブック」（II）

栗原まな「よくわかる 子どもの高次脳機能障害」（クリエイツかもがわ）

橋本圭司「高次脳機能障害が分かる本」（法研）

橋本圭司「高次脳機能障害 ～どのように対応するか～」（PHP 新書）

オンタリオ脳損傷協会 「子どもの高次脳機能障害 理解と対応」（三輪書店）

阿部順子「50 シーンイラストでわかる 高次脳機能障害解体新書」（メディカ出版）

5. 病院にある学校との連携

「病院にある学校」の担当者は、子どもが退院し転籍した後も継続して学校生活をサポートしていきます。

問題が生じた場合、判断に困った場合は、いつでも連絡して相談してください。

連絡先：

